

視点

保育者と子どもの関係構築における共主体のあり方 ― 伴走者としての保育者の役割 ―

桜花学園大学 保育学部
教授 上 村 晶



文科省（2021）から答申された「令和の日本型学校教育の構築を目指して（中教審第228号）」の中で、教師には「子供一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての役割」が期待されています。幼児教育の現場では、遊びの主人公である子どもが、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で健やかに育つために、保育者には子どもの機微を感じ取りつつ「子どもと共にあること」が求められると言えます。

例えば、大学駅伝における“主人公のランナー”と“ランナーを支える伴走者”の関係で考えると、両者は「一緒にゴールを目指して走り続ける」という同じ展望を描いており、そこには「共にあること」によって培われる関係性が潜在しています。しかし、この関係性を子どもと保育者の文脈で捉え直した際、「こんな経験をしてほしい」「ここまでできるようになってほしい」など、ややもすると保育者側の意図が先行した不均衡な関係に陥りやすく、「幼児教育だからこそ何かを教えなくては」と気負ってしまう保育者の姿や、「私には子どもを教育する力がなくて…」と呟く実習生の姿も見受けられます。子どもとは、大人が何かを教え導かなくては成長できない脆弱な存在なのか、それとも、既に内から育つ力を持ち合わせており、何らかの環境が整った際に自ら力を発揮できる可能性に満ち溢れた存在なのか、個々の子ども観が問われていると言えるでしょう。

私は現在子ども理解の研究に着手していますが、社会人としての原点は私立幼稚園の教諭でした。新卒で年少組の担任になった私に、当時の園長先生が「入園したばかりの3歳児には、一人ひとりと“赤い糸”を結んでいくことが大切だよ」と教えてくださったことを、今でも鮮明に覚えています。集団保育の中で個々の子どもと赤い糸を結ぶためには、園

生活を共にしながら子ども理解を深め、一人ひとりと信頼関係を構築していくことが重要です。ただ、「関係構築」と言うのは易く行うは難しであり、最近では「行事や記録が忙しくて子どものことをよく考える余裕がない」という保育者の声も聞こえるなど、子どもとの関係構築に十分な時間を費やす難しさも浮き彫りになっています。

このような場合、例えば子どもを理解しようとしても、『保育者（主体）が子ども（客体）をわかる』といった「保育者→子ども」の一方向的な理解として完結してしまうことを危惧しています。子どもも保育者をよく見ており、各保育者へ見せる姿が違うこともあるため、「子ども→保育者」のベクトルも確かに存在すると言えるでしょう。このように、主体である子どもを尊重する地平から子ども理解を捉え直すと、『保育者（主体）が子ども（主体）とわかり合おうとする』という意識を持ち続けながら関係を築いていくことが、重要ではないかと考えています（上村、2022）。

保育者と子どもの双方の主体性がつながり支え合う関係性を意味する「共主体（無藤ら、2021/大豆生田ら、2023）」という言葉が浸透しつつある今だからこそ、互いの異他性を認め尊びながら主体性を発揮し合う幼児教育が求められているのではないのでしょうか。そのためには、個々の保育者とわかり合おうとする上司のまなざしにも重層的に支えられながら、子どもも保育者も共に主体として尊重される園風土の醸成が鍵を握っていると考えています。

参考文献

- 上村晶（2022）保育者は子どもとどのようにわかり合おうとするのか、風間書房
無藤隆・増田まゆみ（2021）保育におけるコ・エージェンシー（Co-agency）、保育ナビ10月号、フレーベル館
大豆生田啓友（監）・おおえだけいこ（著）（2023）子どもが中心の「共主体」の保育へ、小学館

ひとりひとりへの言葉かけ

全日本私立幼稚園連合会
会長 田中 雅道

文部省の旧庁舎内には映画を視聴することができる部屋がありました。ひな壇が4・5段あり本格的に映像を見ることができました。その部屋で初めて見たビデオにこんなシーンがありました。

登園して朝の身支度が終わった3歳児が、遊んでいる時に道具を乱暴に扱い、先生が注意すると泣き出してしまい、先生はその子のところまで行き、何がいけなかったのかを諭すように話しかけていました。その時、新たに登園してきた子どもが、いきなり先生のもとに走って来て何かを一方的に話しかけました。先生はその子にも優しく声をかけ、朝の身支度をするよう一通りの説明をしてしばらく話をしてから、最初の子どもに対してもう一度、何がいけなかったことなのかを話し始めました。平成12年ころの話ですから、細かいところは覚えていないのですが概ねこのような話でした。

平成10年幼稚園教育要領の改訂では、3歳児保育の本格的な実施と自由保育という言葉の再定義がテーマでしたから、このビデオは新たに本格的に3歳児保育を実施する幼稚園の先生向けに作られたビデオです。自分のことで精一杯の3歳児に対して、一人一人丁寧に対応することを表していたと思います。叱っている時であっても、新たに登園してきた子どもには丁寧に対応しようというメッセージが込められていたのでしょう。

このビデオを私の園の園内研修で見た時に、3歳児の担任は、「私なら、こういう対応はしない。一対一で真剣に怒っている時に話しかけてきた子に対しては、短い言葉で対応はするが、場の雰囲気を読むように対応する。今はちょっと待ってというメッセージを送る」と発言しました。このことがあって以降、私の

園では文部科学省の指定ビデオであっても、その映像を肯定的に見る立場と、否定的に見る立場の両論を話の中心に置くよう心掛けてきました。

3歳児の一人一人に対応するとはどういうことかを考えた時に、まだ、場の雰囲気を読むことは難しいので、一人一人に丁寧な言葉かけをすることは重要なことです。一方で、先生は一人なのですから、先生が初めに叱っている子どもに、今、育ってほしいと考えている課題と、後で無邪気に話しかけてきた子どもに育ってほしいという課題の認識度合いによって、言葉かけが変わってくるということが大切です。ですから、この映像の先生の対応が正しいのか、間違っているのかは重要なテーマではありません。問題なのは、このような文部科学省指定ビデオを、肯定的に見たり否定的に見たりする習慣が現場の中にあるのかどうかだと思っています。

公立幼稚園の先生の研修を見てみると、多くは指導主事の先生が研修を担当しています。指導主事の先生が現場をよく知っていて、文部科学省の指定ビデオを視聴した後に、その内容の良さと限界を認識した話に進んでくれるといい研修になるのですが、文部科学省の指定ビデオは正しいことが示されているという前提で話が進んでいくと、公開保育をしたときなどの先生の対応が正しいのかどうかの議論になってしまいます。幼稚園における保育の現場は、何が正しいのか、何が間違っているのかではなく、ひとりひとりにどう言葉かけをするのか、同じ言葉かけであっても、それぞれに子どもに対する課題認識によって違ってくるのだということを前提に、話を進めていくべきだと考えています。

ホーネット 車内置き去り防止システム

カーセキュリティ機能付き車内置き去り防止システム

- エンジン停止後にブザーが鳴ります。
- 見回りながら後部に設置したリモコンボタンを押してブザーを止めます。

車内センサーが人の動きや振動を検知してアラームでお知らせ！

アラーム音

超音波センサー 2段階衝撃センサー

標準セット

車両の位置情報や移動履歴などスマホやPCで管理できます。

通報メール
(5カ所)

運用管理画面

緊急通報

アナログによる
ヒューマンエラー
防止

デジタルによる
見守り

株式会社 **チャイルド社** コンピュータ部

〒167-0052 東京都杉並区南荻窪4-39-11
ホームページ: <https://www.child.co.jp/>